

わがまち自慢 ～村長室から～

かりわ
新潟県刈羽村
しなだ ひろお
品田 宏夫 村長



本年12月に、村政をお預かりして4期目を迎えることとなりました。この12年間、私が最も訴えてきましたのが「村民が自ら考え行動し責任を負うまちづくり」です。とかく行政は、住民に対して「ああせい、こうせい」と注文をつけますが、そうすると住民の側は「ああしてもらいたい、こうしてもらいたい」と行政を頼ります。それでは、本当の意味でまちづくりはできません。村民が自ら考え行動することに対して行政は公的支援をする、村民も責任を取っていただく、といった自律的なまちづくりが極めて重要だと思います。

刈羽村はこの10月に『びあパークとうりんぼ』*という大型複合施設をオープンさせました。JFA公認のサッカーコート2面と宿泊交流センターやカントリーハウス風のカフェのスイーツガーデン、施設園芸の大型ハウスと園芸トレーニングセンター、新潟大学の先端農業バイオ研究センターなどの施設群ですが、刈羽村の発展に欠かせない要素を有機的に配置した村の新しい財産です。

この事業は原子力発電所と立地地域の共生を表そうという主旨のもと、刈羽村地域共生事業と銘打ち東京電力㈱の寄付で実施したものです。平成9年の発電所完成以来、長い年月をかけて練り上げ、平成22年3月に寄付を受けて「農業・加工物販・飲食・集客」という4つの事業コン

セプトでスタートしました。これをもとに村民にもアイデアを募りましたが、当初から、「公設民営」で運営し、運営各部署は自立して施設の経営にあたっていただくという構想でした。つまり「行政がこのようなものを造りたい」というものから「皆さん方がビジネスをできる環境を行政が用意する」というものでした。

そのため、私たちは長い時間をかけて、事業参画希望の企業や村民の皆さんと、寄付をしていただいた東京電力との間で協議を積み重ねてきました。従来の公共事業や共生事業のあり方を変えたい、という思いがありました。その意味で、この「公設民営」を理解していただき、今回の大型複合施設の開設が可能になったのも、冒頭の「村民が自ら考え行動して責任を負う」ということが村民の間に浸透した結果だと思っています。

職員の意識も変わってきました。私たちは、平成16年の中越地震と平成19年の中越沖地震という2度の大きな地震を経験しましたが、職員は復旧・復興に向けて、文字通り獅子奮迅の働きをしました。他の一部の被災地では職員の残業手当をカットするという話もありましたが、村内に20ある行政区と刈羽村議会は全会一致で職員の残業手当の支給を認めたのです。つまり村民挙げて職員に感謝するという評価をいただいたわけです。この「成功体験」が、

職員の意識変革のきっかけになっています。小さい村だからできるという意見もあるようですが、「いかに村民と寄り添って仕事をを行ったか」という結果だと思います。

行政の場面では、村民に対する「事業説明」や、ときに「説得」などを行うことがあります。それが仕事だと思ってしまうこともあります。だが、実は「共感してもらえ」ことが行政職員の仕事なのです。住民の要望をどのように実現するかを住民とともに考えていくことです。そのためには、職員は日常的に「顔を見せる」「本音を語る」ということが大事です。そうすれば、キメの細かい行政サービスができます。県や国を見て仕事をするのではなく「村民を向いて仕事をするか」が大切で、今後も私たちは「村民とともにスクラムを組む」という姿勢を貫きたいと思います。

刈羽村には、お話しした『とうりんぼ』の他にも特産品の『砂丘桃』や『刈羽米』といったものがありますが、一番自慢できるのは、職員を含め「自ら考え行動し責任を負う」、そうした村民といえます。(談)

※ 刈羽村地域共生事業『びあパークとうりんぼ』

平成24年10月1日にオープンした大型複合施設。施設内には、JFA公認の人工芝サッカー場2面と温浴施設を併設した宿泊交流センター『ピーチビレッジ』、新潟県のブランドイチゴの『越後姫』やトマトを栽培する園芸ハウスと刈羽村特産の『砂丘桃』の圃場、カフェを併設した洋菓子や和菓子を販売する『スイーツガーデン』、ハウス園芸振興のために生産者に野菜の栽培方法のトレーニングを行う『JA柏崎・刈羽園芸サポートセンター』、新潟大学の農業研究施設『新潟大学 刈羽村先端農業バイオ研究センター』などがある。

「スイーツガーデン」



「ピーチビレッジ」の露天風呂「桃の湯」



「びあパークとうりんぼ」全景



びあパーク
とうりんぼ
Peach & Agriculture Park